

大田区自立支援協議会 第6回相談支援部会要旨

文責：事務局

(1) 会議の名称	大田区自立支援協議会 第6回相談支援部会				
(2) 開催日時	令和8年6月10日（水）9：30～12：00				
(3) 開催場所	障がい者総合サポートセンター5階 多目的室				
(4) 出席した委員、事務局等	委 員 <敬称略>				
	名倉 壮郎	二階堂 直子	楮山 大介	深堀 希	大窪 恒
	大類 信裕	草野 牧子	呉 ルミ	清野 弘子	林 久美子
	長濱 久美子	山本 利寛	渡邊 加奈子		
	オブザーバー：廣瀬 あゆみ、江口 隆一、七尾 尚之、岩淵 清美、 村田 行子、羽田 さよこ、蔵渕 ゆき、溝尾 浩子				
	事務局：今岡 正道、村田 亮、内村 直美、酒井 史穂、養王田 龍人、 岡村 空奈				
	欠席者：古怒田 幸子、小嶋 愛斗、後藤 貴久、筒井 寛孝、西山 由佳莉、 与儀 ひとみ、徳留 敦子、松井 知子、西村 亮、小柳 正人、				
(5) 内容・要旨	(障がい者総合サポートセンター所長より挨拶) 障がい児から障がい者への移行の際の伴走的支援について、受け手側と支援者側の両方の視点を持ちながら有意義な議論の場としていきたい。 1 連絡確認事項 (1) 司会、書記の確認 司会は名倉部会長、村田係長、書記は事務局と確認した。 (2) 資料の確認 (3) 自己紹介 (4) 議事録・意見出しカードの確認 (5) 連絡・確認事項 ア 本会の報告(令和8年3月27日（金）) (名倉部会長より報告) 地域生活部会は、昨年度は大田区の地域生活拠点の各機能について検討を行った。今年度はセルフネグレクトについて検討を行う。 防災・あんしん部会は、昨年度は「地域ともっとつながる」というテーマのもと、活動に取り組んだ。福祉と文化と医療の町のスペシャルデーでは、障がい者総合サポートセンター内で、部会での取り組みの展示を行った。今年度は「あんしん」（権利擁護）にフォーカスし取り組んでいく。 名川会長からは、自立支援協議会の全体のテーマである、「意思決定支援」に関する話があった。人は話せることしか話さない、話したいことしか話せない、ということから、本人の意思を支援に繋げられるようにサポート				

することが大切である。また、各部会で出ていた「伴走者」、「連携」というキーワードは各部会の視点で言葉の意味を考えていけたらいいと指摘をいただいた。

イ 運営議会の報告

5月12日（火）の運営議会について資料に沿って報告した。

ウ 年間スケジュールの確認

2 本日の検討課題

（1）中間報告の振り返り

昨年度は「伴走者」と「連携」がキーワードとなった。令和5・6年度では医療との連携について考え、相談支援部会が考える連携とは、Respectを中心とした「説得するよりも納得してもらう」「役割以外のことも一緒に考える」「互いの役割を知る、理解する」「情報共有」「補い合える関係性」という5つの要素により成り立っていることがいい連携である、ということで結論付けた。

• 中間報告書より

相談支援部会では、個別支援会議から地域課題を抽出し検討する、大田区の相談支援体制を検証する、という2つの不変のテーマが設定されている。令和6年度までは、医療や他機関との横の連携について考えた。令和7年度はライフステージに沿った縦軸の連携に注目した。その中で、障がい児から障がい者への支援の移行が課題であるという意見が出たため、令和7・8年度のテーマとした。

委員の方から提供してもらった3つの事例から、障がい児から障がい者への支援の移行に着目・検討し、地域課題を抽出した。

検討の結果見えてきた地域課題を「連携・情報共有」「家族支援」「進路・支援の選択」という3つのカテゴリーに分類し、障がい児から障がい者への移行という視点で検討した。

検討から見えてきた地域課題から、令和8年度は、支援者や相談支援体制不足に焦点を当て検討していくこととした。

（2）「令和7年度大田区障がい者実態調査結果報告書」（抜粋）の確認

（名倉部会長より）

おおた障がい施策推進プランの策定にあたって、障害福祉課で大田区障がい者実態調査を行っている。

調査結果について、相談支援部会で検討することが必要なのではないかと作業部会で意見が出たため、障がい児支援に関する部分を抜粋した資料を用意した。

（3）令和8年度の検討課題について

障がい児から障がい者への移行についての視点から、調査結果報告書をもとに、グループワークを行った。

	● A グループ ・ 障がい児の計画相談支援を利用しない理由として、「相談支援のサービスを知らない」、「利用するための手続きが大変そうだから」という理由に着目した。 ・ 相談支援事業所と保護者のお互いの忙しさと、面談等の日程調整が難しい、利用手続きの書類が多く内容理解が大変、書類の自筆署名は必要か、という意見が挙がった。利用手続きについて、丁寧に説明していくことで家族に寄り添い、支援していくことが大切である。 ・ 障がい児、障がい者支援サービスの情報を、自分から取りに行き、発信していくことは私たちの責務であり、それが連携や伴走に繋がるのではないか。 ・ 児童の相談支援事業所が少ないという意見も挙がった。 ● B グループ ・ 児童の相談支援事業所が少ないという意見が出た。また、どこの相談支援事業所に空きがあるかの情報を得られる場がほしい。 ・ 障がい児から障がい者への切替え時に、知的障がいの方はサービスの手続きに工夫が必要。保護者に説明しても煩雑で、分からない人もいる。サービス利用には結びつかなくても、気軽に相談できる窓口があったらいい。 ・ 急ぎの対応を要する際にセルフプランが有効なことはあるが、ずっとそうであることは課題が多い。セルフプランになったとしても、いずれは計画相談に結びつくという流れを作れたらいい。行政としても計画相談支援事業所を育成するための助成をしていくことが課題なのではないか。第三者の目線が入ることは、本人や家族だけでなく、行政の側にもメリットがある。 ・ 当事者を長く支えるためには、家族支援という視点の相談も必要である。障がい児・障がい者のライフステージの段階ごとに相談できる窓口があれば、必要なタイミングで必要な情報を提供でき、本人や家族の状況が変わる面がある。 ・ セルフプランでしっかり作れる方もいるが、知的障がいを持っている方のプランでは、本人の利益を考えられる視点が必要である。 ● C グループ ・ 障害児相談支援事業所の役割が周知されていない。 ・ 障がい児の相談支援事業所は少ないことから、積極的な周知ができていないのではないかな。 ・ 障がい児では、保護者が若く、仕事をしているため、セルフプランになることが多い。
--	--

	- 相談支援事業所が障がい児から関わっていると、成育歴や家庭環境が分かるため引継ぎがしやすくなる。 - 多くの人は成人への切り替わりのタイミングで相談支援事業所を変えることになるため、障がい者の相談支援事業所で障がい児を受け入れられれば切れ目ない支援ができるのではないかな。障がい児、者一貫の事業所が増えていけばいいのではないかな。 - 今ある障がい者の相談支援事業所が障がい児を1人ずつ受け入れてくればセルフプラン率も変わってくるのではないかな。 ● D グループ - セルフプランを選ぶ背景には、サービス利用までの早さを求める人も多い。 - 調査結果報告資料のライフステージごとの課題について、学齢期では「特に困ったことはなかった」という回答が最も多かった。学齢期はいろいろな場所に所属があるためではないかな。 - セルフプランについてのメリット、デメリットを伝えていくべきである。また、セルフプランを選択しても、当事者と保護者を追跡していく必要がある。ライフステージのポイントごとに、案内をする機会が必要である。 - 障がい児の相談支援事業所数が少ない。利用手続きの煩雑さについて他区を参考に簡易化し、保護者が抵抗なく利用できるようにする必要がある。 (名倉部会長より) 各グループで意見が挙がっていたように、ゼロから何かを作るのではなく、今ある社会資源をどう活用していくかということが大切である。 グループワークでそれぞれ出た意見を作業部会でまとめていけたらと思う。 3 今回決定事項及び次回検討事項の確認 次回日程 令和8年7月8日(水) 9時30分～正午 障がい者総合サポートセンター 5階 多目的室
--	--